5月18日、抱樸館福岡はじめての入居者を迎えました

「抱樸館」は仕事、住まい、人との絆を失った人々の自立を支援する施設です。
たくさんの人々の祝福を受け、５月１日に開所式を終え、スタッフは一丸となって入居者を受け入れる準備をすすめてきました。そして５月18日、はじめての入居者を迎えました。
その１日のようすを取材しました。

ホームレス問題を考える 16

オリエンテーションのようす

入居者を迎える居室

当日の入居予定者は11人。朝９時からのスタッフミーティングでは「入居される方にも、自分たちスタッフにも今日は新しい人生のはじまりの日」「入居者は疲れてここに来られるから、ほっとしていただけるように十分に配慮しよう」などを申しあわせて、記念すべき一日はスタート。

徒歩や自転車で、あるいはスタッフが迎えに行き、三々五々と入居者が到着。出迎えるスタッフの挨拶は「ようこそ抱樸館へ！」。再出発の門出を祝う。

居室や施設の案内を終えると昼まで入浴・自由時間。真新しい浴室に向かう人、洗濯をはじめる人、談話室のテレビをつけて「おっ、デジタルだ」と見入る人、「お父さんはどこから来たの？」と雑談をはじめる人、居室で寝入ってしまう人、それぞれの時を過ごした。

昼食はスタッフも一緒にテーブルを囲む。この日のメインメニューは厨房スタッフが心を込めて手作りしたポテトコロッケ。新鮮な野菜も添えられている。ふっくら炊き上げられたご飯に「お代わり」が続出し、見守るスタッフも嬉しそうだ。一段と和やかな空気が流れる。

再起の決意を固める

午後からのオリエンテーションでは青木館長より自立のためのプログラム、抱樸館福岡での暮らし方の説明があった。

スタッフはまず入居時の生活保護申請を手伝い、生活の基盤を整える。その後病を抱えている人は病院にかかる。健康を回復して後、職業訓練などで就労の準備をする。就労し一定の給料が得られるようになると抱樸館を出て地域のアパートなどに移る。その際の保証人の提供や家財の支援もする。また障がいを抱える人、高齢で働けない人には手帳の申請や介護申請などの支援もする。自立を果たした後も入居者一人ひとりの人生に最後まで伴走する。

抱樸館の一日のタイムスケジュールは別表のとおり。入居期間中は館内でも館外でも飲酒は禁止。小額の小遣いを除いて、現金・カード類は事務局で預かり、自立の時に備えてできるだけ貯金する。最長６ヵ月の入居期間で自立するためには、規則正しい生活を取り戻し、抱えているさまざまな困難を解決していくことが必須となる。

青木館長は、いく分緊張気味の入居者に「ボランティアの理容師はただ今募集中です。丸刈りなら僕ができます！　弁護士による無料の法律相談も準備します」など、できることはなんでもするという姿勢を伝える。皆に安堵の表情が浮かぶ。

抱樸館福岡との契約書作成ではこれまでを振り返って履歴を記入する。現住所欄はこれからふるさとにもなる抱樸館福岡の所番地。そして最後に押印。再起の覚悟を決めた厳粛な瞬間。

抱　樸　館　の　一　日	
6:00	起床
7:00～7:45	朝食
8:00～8:30	清掃プログラム　※1
	出勤・求職活動・通院など 個別プログラム
12:00～12:45	昼食
14:00～15:00	自立支援プログラム　※2
16:00～17:00	各種セミナー　※3
18:00～18:45	夕食
19:00～22:00	入浴
22:00	消灯

※1当番制による館内・地域清掃
※2音楽セッションや体操プログラムなど
※3債務整理の基礎知識や生活習慣病セミナーなど

全員で食事

困った時は抱樸館へ

当日の入居者のうち、スタッフが炊き出しで出会った人は２人。副館長の瀬崎さんは「今回は病院や支援団体などネットワークからの紹介が多い。また、ここが新聞・テレビなどで大々的に報道され、それを見て来られた方も。完全に路上生活に陥る前にここに入居されたのは幸いと思う」と支援の広がりや社会の注目度を実感する。

今回入居した61歳の男性。57歳からこれまで３度の脳梗塞を患い、退院しても帰るところがなくなった。麻痺が残っており、しゃべるのが少し困難。就職したいと思って電話をしても「酔っているのか！」と切られたこともあったという。「頭はしっかりしているんだけどね」と無念そうだ。

瀬崎さんは「ここは抱樸館。施設名のとおり『樸』を抱くところ。入居された方をしっかり受け止めていきたい」と、一日を終え再度自身にも言い聞かせるようにおさえた。

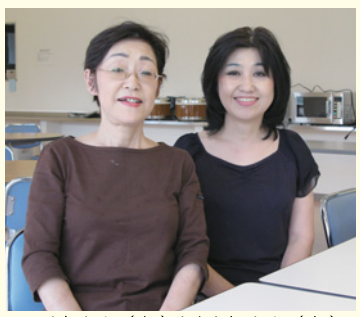
・・・・・・・・・・・・・・・

「抱樸館」名前の由来

老子の「素を見し樸を抱き」からとられた。「樸」は原木の意。「抱樸」とは、原木・荒木を抱きとめることだ。傷つき疲れた「樸」が、抱かれ受け止められた時、「樸」は再起する力を得て、明日の自分を夢見ることができる…。

スタッフ紹介　厨房主任 四辻由美さん

普通の家の台所をここに作りたい


四辻さん（左）と川上さん（右）

困窮と孤立に長く苦しんできた人に、それを気遣って準備される食事は、心と身体を温かく満たすものとなる。その温もりを大切にしたいと抱樸館福岡の食事作りは館内の厨房で手作りされる。厨房スタッフは現在３人。主任はグリーンコープ生協ふくおかの組合員四辻由美さんだ。これまでは在宅福祉ワーカーズ「ぱれっと」に関わってきた。

「私と福祉の関わりは１９９４年、グリーンコープの地域福祉政策が定まったときのことでした。プランはできたが、する人がいない。じゃ私がと、思わず手を挙げていました」。以降、グリーンコープの地域福祉の現場で活動し、介護福祉士の資格もとった。福祉が性に合っていた。

昨年、思いがけず抱樸館福岡の厨房スタッフにという声がかかった。その時、グリーンコープの福祉の理念はここにつながっていたのだと思ったという。59歳になる今、ここは最後の働く場所となるだろう、全力で関わろうと決めた。

入居日に備えて、まず職員の昼食を作るところから仕事をはじめたところ、10日ほどして、開所を伝え聞いたのか毎日のように生活に困った人が訪れた。「そんな時、とりあえずは『食べもの』なんです。スタッフの相談員から『何かないですか？』と言われて困らないようおにぎりを作って冷凍しておくことにしました」。

若い頃、妹と２人で大手企業の社員食堂の実務を請け負っていたことがある。大人数の食事を用意することには少し慣れている。今回も息が合った妹、川上英美（ひでみ）さんが副主任を引き受けてくれた。心強い。

厨房の運営も託されている。「マニュアルは一切ないんです。満室になると約１００人が同時に食事をとることになるので、どんな手順で用意すればいいのか。また、どんなメニューを準備すればいいのか…」。ついつい考え込むという。

「ここを普通の家の台所のようにしたいですね。心がほどけるような…。例えば、『明日のおかず何？』とか『〇〇が食べたいな』とか入居者に言ってもらえるようなところになると嬉しい」。

そして、少し落ち着いたら、やがて自立していく日のために、簡単な調理の仕方も教えたいという。

入居者のことを思う眼差しは、まちがいなくお母さんのものだった。